あの日、機動六課

弥本宇斗華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの日、機動六課

【Ｎコード】
Ｎ５３５６Ｏ

【作者名】
弥本宇斗華

【あらすじ】
はやて率いる機動六課に舞い込んだギンガからの依頼、それはかつてない波乱と激闘（？）の前触れだった・・・
度重なる困難の待ち受けるなのは達の運命やいかに・・・
リリカルなのはの「機動六課シリーズ」第２弾の登場です。
前作同様、ギャグにギャグにギャグを重ねたドタバタギャグコメディになります。

1（前書き）

二作目の投稿になります。
またスローペースになることが予想されますが、読んでいただけると嬉しいです。

1

穏やかな日差しの差し込む廊下を六人の隊員が歩いていた。
正確には、髪をサイドポニーにまとめ上げた少女と、目の覚めるような金髪を腰まで伸ばし、下の方で乱れないように黒いリボンで束ねた少女の後ろを、青い髪のショートカットの少女、オレンジ色の髪のツインテールの少女、赤髪の少年と桃色の髪をショートカットにした少女の四人がついて行く形だった。
「なのはさん、八神部隊長から呼び出しってどういう事ですか？」
四人のなかの一人、ツインテールの少女、ティアナ・ランスターが、沈黙を破って口を開いた。
「さぁ…、私も知らないんだよね……」
「私達も、はやてから『みんなを部隊長室に連れて来て』って言われただけだからね」
その質問に、先頭を歩いていた一人、サイドポニーの少女、高町なのはが、続けて金髪の少女、フェイト・T・ハラオウンが答えた。
「まぁ、急いでやるような仕事もないし、世間話でも……ってとこじゃないかな？」
「なのは、それはないんじゃ……ないかな？」
「あの…フェイトさん、なんで疑問詞なんですか？」
「否定できないんですね？」
なのはの予想に、否定しようとしたものの否定しきれないフェイトの言葉に、赤髪の少年、エリオ・モンディアルが聞き返し、桃色の髪の少女、キャロ・ル・ルシエがツッ込みを入れた。
「とにかく、行ってみれば分かるという事で、この質問はおしまい。いいね」
なのはが、両手をポンポンと叩いて、話を締めた。
「他に質問はないね？」
「はい、なのはさん！」

念のための確認だったが、青髪の少女、スバル・ナカジマが、元気に手を挙げてから一歩前に出た。
「これ書いてる作者ですけど、表現が全く駄目ですね。なのはさんとフェイト隊長を『少女』って書くなんて、年齢的にキツすぎますよ」
軽く笑いながら、作者への批判を言ったつもりだったが、
「…あれ？」
言い終わって、みんなを見ると、なぜかさっきまでの和やかムードが消えて張り詰めた空気が漂い始めていた。
「ス…スバル、あ、あんた何て事を……」
「へ…」
頬をひきつらせ、恐怖に怯えるティアナの声に振り向くと
「スバル…」
「そこの資料室でお話しようか…」
右肩をなのはが、左肩をフェイトが、がっしりと掴んでスバルを引きずるように資料室に入っていった。
「みんなはちょっと待っててね」
扉を閉める前になのはに言われ、ティアナ達三人は黙って首を勢いよく縦に振って頷いた。それを見届けると、なのはは扉を閉めてロックをかけた。
ロックがされた事を確認してから、ティアナ達三人は扉の前に駆け寄り、中の声が聞こえるように耳を扉に押し当てた。
「あの……なのはさん、腕はそんな方向には曲がりませんよ！　フェイト隊長たすけ…って何でそこでバインドするんですか！？」
部屋の中からは、怯えるようなスバルの声と、人体からは聞こえてはいけない音が聞こえてきた。
「スバル、日本の法律では１９歳までは未成年なのよ」
「だから私達は『少女』って呼ばれてもおかしくないのよ」
「だから、今後このような事を言わないように、今からお勉強しようか？」

「あの…なんでデバイスをこっちに向けて……」
更に、これから起こるであろう惨劇を予感させる声が続き
「いやッ！　ごめんなさい！！　なのはさん、フェイト隊長、許しッ！！！」
必死の抵抗の声もむなしく、そして……

1（後書き）

スバルがどうなったのかは・・・・・ご想像におまかせします
尚、作品への感想やご意見などいただけるとすごく嬉しいです

2（前書き）

作中で重大発表があります。
こうご期待ください！！

2

「失礼します」
「おぅ、みんな遅かったみたいやけど、どないしたん？」
「ごめんね、スバルが怪我をして、医務室でシャマルさんに診てもらってたんだよ」
「スバルが？　どないしたん？」
フェイトに言われて、はやてがスバルを見ると、顔をその髪より青くして、何かに怯えるように何度も「もう二度と言いません」とブツブツと呟いていた。
「えっと……何があったん？」
ただならぬスバルの様子に、顔をひきつらせながら聞いてみたが、ティアナ達三人が真実を話せるわけがなく、思念通話で話し合い、議論に議論を重ねた結果
「えっと……スバルはエリオとキャロに『口は災いのもと』という言葉の意味を身を持って教えてあげたんですよ…」
代表してティアナが当たらかずとも遠からずと、はぐらかすようにして曖昧に答えた。
「そ……そうなんか。ま、まぁスバルとティアナはエリオとキャロよりもお姉さんなんやから、二人の見本になるようにならなあかんで」
三人のなのはとフェイトに対する異常な怯え方に、これ以上聞くのは危険だと悟り、聞くのを止めた。
という事で改めて本題に入った。
「はやてちゃん、みんなを連れて来たけど、どうしたの？」
「何か大事な話でもあるの？」
「うん、ちょっとこれを見てほしいんや」
そう言いながら机に置かれたパソコンのモニターを向けた。
「実はアリサちゃんとすずかちゃんが今度の冬コミで、同人ゲーム

を出すらしくてな。それであたしらをモデルにして対戦ゲームを作ったんやけど、市場調査を兼ねてアーケードゲームにして近所とミッドのゲームセンターでしばらく置いてたらしいんや。せやけど店の方から大不評やったらしいんよ。で、その原因をみんなで話し合おうと思ってみんなを呼んだんよ」

「うわあああぁぁぁ何その天文学的に最低なプライバシーの侵害アンド情報流出！？」

「アリサちゃんとすずかちゃん何作ってんの！？　冬コミって当選したのこれ書いてる作者でしょ！！　ゲーセンに設置した！？　そりゃ店長、怒るわよ。メル〇ラじゃないんだ……」

プログラムを起動させながらの説明するはやてに、フェイトが驚いて叫びまじりに言うと、続けてなのはがはやての言った事に的確にツッ込んでいったが、最後のツッコミをいれ終わる前に目眩を起こして倒れ込んだ。

「なのはさん！？」

「だ、大丈夫。ちょっとクラッとしただけだから…」

慌てて肩を貸しに来たスバルを制するように、なのはは起き上がりながら言った。

「起承転結の『起』の時点であんなにボケられたら目眩くらいおこす……って、なのはさん、さらりとスゴい事言いませんでした！？」

なのはの状況にあわれみの声をかけかけたティアナだったが、なのはのツッコミの最中に飛び出たとんでもない爆弾発言にツッ込みを入れのだった。

2（後書き）

作中にも書きましたが、昨年同様、冬コミにサークル参加することになりました。
この作品を出す予定ですので、更新がかなり遅れるかと思いますが、ご容赦ください。

3（前書き）

毒舌ティアナ降臨です！！

3

「まぁ、なのはさんの重大発表も終わったところで、検証を始めよか」
「はやてちゃん……、私達のプライバシーの蹂躙されてる事は無視なんだね？」
「友達やめていい？」
あくまでもなのは達のツッコミを無視して、はやては検証を始めた。
「いやほんまに何で店側からクレームがついたんやろ？　設置当日から口コミで人気に火がついて、店に客が殺到したんや。それに登場キャラがなのはちゃん達やから、プレイしたユーザーからの反応は凄かったんやで……」
「確かになのはの可愛さはアルカンシェル並の破壊力だから、人気は当然なのは当然だけど……」
「フェイトさん、なんですかその親バカならぬなのはさんバカ発言？　てか変態のポジションは八神部隊長と被りますから止めてください！　いまはそんな議論よりもやるべき事がありますよね！？」
当時の状況を語りながら首を傾げるはやてに、ちょっと危ない理論でなのはの人気を出して検証し始めたフェイトをティアナがツッ込んでからはやてへの詰問を促した……が
「やるべき事って…あ、やってみたいんか？」
「そういう事じゃなくて、このゲームを作る為に流出させた極秘資料の内容とかの確認とかですよ」
見当外れの事を言い出すはやてに、ティアナはパソコンを指差して言った……しかし
「なぁ、二つ前のフェイトちゃんに対して言ったセリフ、ちょっとひっかかるで」
「話をひとつに絞れや！　この貧乳狸！！」

とんちんかんにはぐらかすはやてに、とうとう耐えきれなくなって自分のキャラと相手が自分の上司だということを忘れてティアナはブチ切れまじりに罵声を浴びせたのだった。

3（後書き）

短くなってしまいましたが、どうしても分けるためにあえて短くしました。

4（前書き）

毒舌キャロ降臨です！！

4

「ワタシナニカマチガッタコトイイマシタカ〜〜？」
「ティア、大丈夫！？」
はやての制裁（シュベルトクロイツによる殴打）によって、仰向けに倒れて目を回してながら片言で謝るティアナに、なのはとスバルが駆け寄り抱きかかえた。
「ティアナ、貧乳はともかく狸はないやろ、狸は」
「怒るポイントそっち！？」
てっきり「貧乳」に怒っての制裁かと思っていたメンバーを代表してエリオがツッ込む。
「エリオ、ティアナにいくら貧乳だと騒がれても、あたしの練りに練り上げたこの肉体を見れば、それは全くの間違いやとみんな分かってくれるやろ」
自信満々に胸を張りはやては言い返した。
「あの……八神部隊長。」
「なんや？　キャロ」
「このアニメが世に出てから数年、多くの同人作家の皆さんが八神部隊長の事を貧乳キャラとして扱い、その事を題材にした同人誌が数多く出回ってるこの状況でどこからその自信は湧いてくるんですか？」
「はうあッ！！」
キャロの核弾頭並みのえげつない会心の一撃が、はやての自信を打ち砕いた。
「うわぁ…、今のはキッツイなぁ……」
「はやてちゃん、死んだかな？」
「天然キャラって悪気なく心の傷を抉るなぁ」と思いつつ、エリオとなのははショックのあまり、左胸を押さえて直立不動状態で虚ろな笑顔のまま凍りついた状態のはやてを見ながらそう呟き、そして

はやての動向を見守る事にした。
……
……
…
「キャロ…」
数分間の静寂の後、はやての手がキャロの頭に触れた。
そこにいたメンバーは「不味い、キャロが殺られる」と息をのんだ瞬間だった。
「えぇか？　それだけ同人誌が出回っているって事は、あたしの練りに練り上げたこの体が視聴者と同人作家の皆さんを魅了してる証拠やないの」
「すごい！　耐え切った！！」
「ポジティブ思考すげぇ！？」
なのは達の予想を裏切って、キャロの頭を撫でながら諭すはやてを見て、スバルとエリオの感心の声とともに歓声が起こった。
その時
「う、う～ん……あ、あれ、ここは……？」
「ティア！？」
目をまわしていたティアナが意識を取り戻して、よろよろと上体を起こした。
「ティアナ、大丈夫？　何があったか覚えているかな？」
まだ意識が朦朧としているティアナに、なのはが優しく声をかけた。
「えっと…、八神部隊長に鈍器（シュベルトクロイツ）で殴られて、気付いたら川のほとりにいて……」
「それって……」
「ねぇ、その川の近くに血祭ドウコクはいた？　閻魔あいちゃんは？　ピッコロさんは？　フリーザは？　セルは？　デビルマンは？」
「ちょッ、まッ、フェ、フェイトさん、く、苦しいです！」
「フェイトさん、何を聞いてるんですか！？」

キャロが自分の想像を顔を引きつらせて口に出そうとしていたら、それを押しのけてフェイトが少年のように瞳を輝かせてティアナの両肩を掴んで上半身をガクガクと揺らしながら聞き始めたので、スバルがツッ込んで止めた。
「フェイトちゃん、なんで行き先が地獄限定なのかな？」
エリオのツッコミ忘れたツッコミをなのはが補完した。
「いえ、川のほとりには綺麗な花畑がありまして、そこに死んだはずのお兄ちゃんがいたんです。」
フェイトの質問攻めから解放されたティアナがこんこんと語り始めた。
「それで、少しだけ話をしてたんだけど、『まだこっちに来ては駄目だよ』って帰されたんです」
「へぇ、いいお兄さんじゃない」
フェイトが思わず感心したが、
「去り際に『いいかい、隊長さん達は君に厳しく言ってくるけど、全て君の為を思ってやってくれているんだから、ちゃんとそれに応えなきゃ駄目だよ。お前が執務官になった時に必ず教わっておいてよかったって時がくる筈だ』って教えてくれたんです」
「そ…、それはまた……お兄さん、本当にいい人っだったんだねぇ……」
続けて出てきた言葉に、思わずティアナを抱きしめてしまったのだった。
「ほんまええ話やなぁ……よし次のシーンにいこか？」
そんな二人を見て一言、はやてはそう言い放った。
「ちょっとちょっと！　はやてちゃん、いいシーンなんだからもう少し余韻に浸らせてよね！」
「何言うてんねん。　こんな序盤で、オチに使えそうなそうなええ話持ってきたらあかんやろ？」
なのはの提案を流してはやては次のシーンへ無理矢理移行した。

4（後書き）

前話が短くなってしまった分、今回は長くなりました。
感想お待ちしてます。

5（前書き）

ネタである世界に行っております。
この世界、皆さんだったらどういう行動をとりますか？

5

「まぁ、意識もはっきりしてるし、大丈夫そうだね」
「はい、ご心配をおかけしてすいません」
ティアナの発言が流されたので、なのははティアナの体調を労る事で話題を移した。
「もう、はやてちゃんにあんなこと言っちゃダメだよ」
「すいません」
そして、はやてに対する暴言について注意を始め……
「言うんだったら、ちゃんと『そんなんだからアニメ本編やＶｉｖｉｄで変身シーンもサービスシーンもカットされるのよ！！』ってまで言わなきゃ！」
「なのはさん、なんて事すすめてんですか！」
「それ言ったらティアナさん、さっきの川を渡りきっちゃいますよ！！」
るかと思ったら、とんでもない事を言い出したのでフェイトとキャロがツッ込んだが、
「大丈夫、あの状況のティアナなら、もうこれ以上は悪くはならないから。有名な厚生労働省の役人も言ってるじゃない。『一億円の借金をしてる人に実は一億百円だったって言うようなもの』的な事なんだよ」
「どこの海〇尊先生ですか！？」
「フェイトちゃん……、キャロに色々な本をすすめるのは悪くはないとおもうけど、キャロくらいの年頃の女の子に『チームバチスタの栄光』をすすめるのはどうかと思うわよ」
「あれッ？　私？　私に振るの！？　その前にすすめてないから！！」
元ネタをキャロにツッ込まれた事について、フェイトに思わぬとばっちりをあびせた。

「なのは、そんな小ネタやるよりもティアナに弁護士を紹介しなきゃ」
「そうね、ティアナ、まずは内容証明をうてばほぼ解決するはずだけど、裁判になっても刑事告訴はそんなにお金かからないから……」
「なのはさん、フェイトさん、生々しい、生々しいですよ！」
「おふたりとも、私にやった事を棚に上げて何すすめてんですか！！」
あまりに生々しい内容に、エリオがスバルが慌ててなのはとフェイトとティアナの会話を止めに入った。
「な、なのはちゃん、フェ、フェイトちゃん、もしかしてめっちゃ怒ってる？」
さすがにはやても二人の「裁判」発言に頬をひきつらせながら、恐る恐る聞いた。
「何を言ってるのはやてちゃん」
「私達に無許可でそんなプライバシー侵害なんてされて、怒ってるわけないじゃない？」
「ひいいいいいィィィめちゃくちゃ怒ってるうううぅぅぅ！！」
それに対して、背後に怒りの炎を滾らせながらも、最高の笑顔で答える二人の態度に、はやては心底震え上がらせた。
「！」
「あ、あの笑顔は！？」
なのはとフェイトの笑顔に、エリオとキャロの表情を凍りついた。
「ど、どうしたのエリオ、キャロ？」
「なのはさん達の笑顔がどうかしたの？」
尋常じゃない二人の様子にスバルとティアナが心配そうに尋ねた。
「や、ヤバいですよ、なのはさんもフェイトさんもあの時以来の『相手の死体の処理方法まで考えてる時』の笑顔ですよ！！』
「あの時って？」
あえてエリオの発言の後半をスルーしてティアナはエリオの言った「あの時」について聞いた。

「実は先日、スバルさんとティアナさんが八神部隊長の付き添いで本局に行っていた時に、僕達はなのはとフェイトさんと一緒に第九八一三世界に行っていたんです」
「九八一三世界って、管理局でもいろんな意味で危険な世界って言われてなかった？」
「そうそう、通称『聖痕〇クェイサー』の世界って言われてるんだよね」
「スバルさん、伏字は場所を選んでくださいよ！　数字の読みの時点でバレバレなんですから！」
　スバルのボケにキャロがツッ込んでから、エリオが当時のことを語り始めた。
「それで一度、視察に行く事になったんですが、その最中に妙な反応があって現場に駆けつけたんです」
「それで、何があったの？」
「はい、そこでは、全裸の女の人がテレビでは放送できないような放送禁止用語を喚きながら暴れまわっていたんです。」
「ぜ…、全裸？」
「でも、それだけじゃなくて、それを止めようとしてる人達もいたんでですけど、その中の一人もぜ、全裸だったんです。　それで…、その人達の黒服で銀髪の男の子が女の子達の胸を吸い始めたんです！」
「エリオ、大体分かったから落ち着きなさい」
「よしよし、年頃の男の子に全裸って言葉は辛かったよね。全裸は……」
　年頃の男の子でもあるエリオは顔を真っ赤にして説明を続けるエリオを察して、スバルとティアナはエリオを優しく止めた。
「で、それを見てなのはさんとフェイト隊長がキレたわけね？」
「いえ、その時点ではまだ注意するだけだったんですよ」
　エリオの言った事から、ティアナはそう結論付けたが、まだ足りないとばかりにキャロが続けて口を開いた。

「注意しに行ったら、『誰か知らんがお前のソーマももらうぞ』って言って、なのはさんのバリアジャケットの胸元をむしり取ろうとして抵抗されたら、『じゃ、お前でいいや』って言って、私まで襲い掛かってきたんですよ！」
「あ、そりゃ切れるわね」
　当時のことを思い出してか、キャロは怒りに肩を震わせながら言った事に、ティアナが納得したように言った。
「本当にあの時は凄かったよねぇ……」
「そうそう、『管理局で最も水樹奈々に似た声を持つ』といわれるフェイトさんの美声が、怒りのあまりに『水木一郎』になってたもんね」
「『みずき』違いもいいとこだ！　てか漢字だったら『水』しか合ってないわよ！？」
「なのはさんも凄かったですよ。　非殺傷設定のストライクフレームで体に刺してから、零距離エクセリオンバスターを放っても相手を死なせないんですよ」
「怖すぎるわ！」
　当時を楽しそうに語るライトニングの二人の談笑を、スターズの二人がツッ込んだ。
「最後はお二人で、オリジナル合体魔法『スター・プラズマ・ザンバー・ライトブレイカー』でその周辺地帯にクレーターを作ったんですよ」
「最後の最後までえげつなさ過ぎるわよ！」
「あんた達なんで止めなかったのよ！？」
「え、なんでとめるんですか？」
「僕達も一緒に戦ってたんですよ」
「一緒になって殺戮行為をやってどうすんのよ！！」
「二人とも……、六課にきてから『常識』ってものがなくなってない？」
自分達の行動がなぜ咎められているのか分からずきょとんとしてい

るエリオとキャロの将来を、スバルとティアナは本気で心配するであった……

5（後書き）

今年、一番の問題作の世界を破壊しかけてますが、なのはさん達なら許されますかね～

感想お待ちしております

6（前書き）

今年最後の投稿になります。
前作に出てきた方々が出演されます。

6

「あの……、あの時の話についてツッ込んでいるのもいいですけど、なのはさん達を止めなくていいんですか？」
「そういえばそうだった……ってきゃあぁぁぁーーー！！」
キャロに言われて、ティアナははっとしてなのは達を見ると、壁に追い詰められたはやてが、なのはとフェイトにそれぞれのデバイスを向けられていた。
「二人とも落ち着いて！　確かに二人に黙っていたんは謝る。せやけど、『ぜひともやるべきだ』ってある人達に勧められたんよ」
「ある人達？」
「それって誰かな？」
はやての必死の弁解に二人が聞き返すと、
「我々だよ。なのは君、フェイト君」
後ろから聞こえてきた声に、みんなが振り返ると、
「ハヤタさん！　モロボシさん！」
「光太郎さんに、おおとりさん、ミライ君！」
「やぁ」
「なのは君にフェイト君、久し振り」
部隊長室に入ってきたウルトラ兄弟の皆さん達に、なのはとフェイトが駆け寄って握手を交わした。
「それにゼロ君」
「おいおい、なに言ってんだ。俺はこの姿の時はランって呼ばれてんだぜ」
そして、なのはに「ゼロ」と呼ばれた青年が自分の名前を正すと
「えっと、彼は……？」
ハヤタ達の後ろにいた見覚えのない青年に気付いて尋ねると
「あぁ、彼の名はレイ、地球人のレイオニクスで、レイブラッド星人の血を引く怪獣の力を操る青年で、我々の故郷である『光の国』

を救うために助けてくれた大切な仲間なんだ」
「君達に紹介したくて連れてきたんだよ」
ハヤタに前に連れ出されて、肩をたたきながらなのは達にそう紹介した。
「はじめまして、レイです」
「こちらこそ」
「よろしくね、レイ君」
レイと握手を交わすと
「皆さん、今日はどうしてミッドへ？」
なのはが、ハヤタ達に用件を切り出した。
「実は、なのは君の監修した戦闘シュミレーターを見せてもらいに来たんだよ。光の国での教導に役立つかと思ってね」
「そこで、一度、俺達で試してみようと思って、手の空いていたメビウス達を連れてきたんだよ」
「そうだったんですか」
「って、それよりもどうしてはやてちゃんにゲームの制作をすすめたんですか？」
ハヤタ達が六課に来た理由を聞き終えると、なのは達は本題を切り出した。
「なぜかって、理由は君達が我々と同じく、皆から憧れを抱かれる存在だからだよ」
ハヤタが、なのはとフェイトに微笑みかけると諭すように語り始めた。
「君達の後ろにいるスバル君は、なのは君、君に火災現場で助けられたのがきっかけで管理局に入局したように、君達に憧れ、少しでも君達のようになりたいと背中を追いかけてくる若者がいるが、それが叶わない若者がいる事も確かだ。そんな若者達がゲームのなかだけでも君達のようになりたいというささやかな願いを叶えてあげてもいいのではないかとおもったんだよ」
「そ、それは……」

「そうですけど……」
ハヤタの言っている事が間違ってないのは分かっていても、未だに納得しかねない返事を返すなのはとフェイトに対して、
「お前ら、何をそこまで意地になってんのか知らねぇけどよ」
ランが二人の前に出て、持っていたバッグから色々と出し始めた。
「教導の資料として、子供の頃の話を映画化して、更にフィギュアとか、こんな際どい水着や入浴シーンのポスターとか作ったのに、比べればたいした事ないだろ？」
「！」
次々と、なのはやフェイトのフィギュアやグッズを出して机に並べながらそう言うと、なのはとフェイトははっとして
「そうだ……、そうだよね！」
「ありがとう、ゼ、しゃなくてラン君、おかげで迷いが吹っ切れたよ」
さっきまで迷っていたのが嘘のような笑顔でランに感謝の握手をした。
「どうやら、無事に解決したみたいだね」
「皆さん、ほんま助かりましたわ。」
「よかったね。はやてちゃん」
そんな三人のやり取りを見ながら、ハヤタ達に礼を言うはやてに、光太郎とミライは肩をポンポンと叩きながら言った。
しかし、
「あのさ……、ゼロ」
そんな雰囲気に水を差すようにレイが口を開いた。
「ここに出したポスターやフィギュアって、まさかと思うけど……、ゼロの私物だったりとかしないよね？」
「あ……」
レイに言われて、ランは、自分がみんなの前でとんでもない事をしでかしてしまっていた事に気付いたが、時すでに遅く……
「ゼロ、今日は徹底的に闘り合おうか？」

「え、え、ちょっと親父！？」
「セブン兄さん、俺も手伝いますよ」
「ちょっ、まっ、親父達二人相手ってそれマジで死ぬから！」
「はやて君、タロウ兄さん、俺達は先に行きますよ」
「二人とも、訓練場は壊さんといてな」
「心配すんのはそっちかよ！！」
ランを引きずりながら、ダンとゲンは部隊長室を出ていった。
「セブン兄さん、はりきってるなぁ」
「親子のコミュニケーションは大切にしろってウルトラの父に教えられてから、天の川で渓流釣りしに行ったりしてるそうですよ」
「天の川で釣り！　あそこって魚が釣れるんですか！？」
光太郎とミライがほのぼのと話している内容に、スバルが驚いて質問すると、
「あそこの川、色々と大物が釣れるんだけど、7月7日過ぎに地球からくる短冊で溢れかえってしまうから、ウルトラ戦士や怪獣、宇宙人に超獣、みんなで回収してるんだ」
「うわぁ……日本の伝統行事の裏でそんな後始末してたんですか？」
天の川の裏事情を知ってしまい、なのは達は引きつった笑みを浮かべた。
「そしてきれいになった天の川の前で、我々の生みの親である円谷英二監督に黙祷をみんなで捧げるんだよ」
「7月7日は監督の命日だから、その日だけはみんな戦う事が禁じられているんだよ」
「あの……、リアルとネタを混ぜ合わせるのは止めてくれませんか？」
しみじみと語り合うウルトラ兄弟達に、ティアナはそうお願いした。
「さて、我々もそろそろ行くとするか」
「なのは君、みんな、また後でね」
ハヤタに促されて、光太郎達は挨拶をしてからウルトラ兄弟達は

部屋を後にして出ていった。

6（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
いつも読んでいただいている皆さんに申し訳ないのですが、この作品はコミックマーケット79にて、同人誌として販売することになりますので、会場に来てくれた方のために、しばらく更新を休止させていただきます。
再開は未定ですが、新作を投稿していこうと思っていますのでよろしくお願いします。

7（前書き）

コミケ終了から大分、時間がたちましたので、少しずつ投稿していきます。

7

ウルトラ兄弟の皆さんとレイを見送ると
「それじゃあ、検証を始めようか」
「はやて、ゲームを立ち上げてくれる」
「了解や」
さっきまでの態度が嘘のようになのはとフェイトは、みんなに指示をとばした。
「八神部隊長…、検証を始める前に、管理局の戦闘データをゲームに使って大丈夫なんですか？」
ティアナが一番心配な事を聞くと
「大丈夫や。今回は○閣諸島のような流出映像やなくて、一般に公開されてる映像を参考にしてるし、出すのは事件が解決してから、相手側から許可を得てからだすから問題なしや。」
「それなら安心ですね……って時事的に危ない例えを出さないでくださいよ！！」
ゲームを立ち上げながら説明するはやてに、ティアナは安堵の声をあげかけてからはっとしてはやてを止めた。
「よし、ゲームを立ち上げたで……って、みんな、そこからやと見づらいやろ？　もっと近づきや」
はやてがゲームを立ち上げ終わって、なのは達の方を見ると、みんながはやてから離れていたので、みんなに見えるようにパソコンの近くに来るように促すと
「みんな、近すぎや」
全員が一斉に近付いて、モニターに顔をめり込ませられたので、部隊長室に備え付けの大型モニターで見ることになった。
「それで、一体どんなゲームを作ったの？」
準備が整ったところでフェイトがはやてに聞くと、彼女は待っていたとばかりに説明を始めた。

「ゲーム自体は『機動戦士ガンダムｖｓシリーズ』をモデルにした対戦アクションゲームで、タイトルは『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　管理局ｖｓナンバーズ』や」
「また、そんな色々な関係者に怒られそうなものを……」
タイトル自体で危険な予感しかしない事にティアナがぼやいた。
「せやけど、なんで店側からクレームがついたんか分からんのや。戦闘シーンも気合い入れたし、プレイしてくれたユーザーのリピート率を高めるために、戦闘前の変身シーンも規制解除版にしたのに」
「規制解除版……って、何を解除したんですか？」
はやての口から出てきた言葉に、エリオが聞き返した。
「何って、まずはエリオの変身シーンは最初からインナーシャツを着込んでいたから、ちゃんと服が全部消えるところからしたんや」
「なんて事してんですか！！」
はやての説明に、エリオが顔をひきつらせてツッ込んだ。
しかし
「ちなみに映像はこれな」
「わあああぁぁぁーーー！！　出さないで！　見ないで！　見ないでください！！」
エリオのツッ込みをスルーして、はやてがその問題の変身シーンを大画面モニターに映し出したので、エリオは悲鳴をあげながら両手を精一杯広げて、なのは達に見えないようにモニターを隠した。
「リリカルなのはを見てくれてる女性ファンの心を確実に掴むええ方法やと思ったんやけどなぁ……」
「ごく一部の女性ファンのピンポイント狙いにいって、大部分を占める男性ファンを捨てる気ですか！？」
はやての見当違いの目論見にスバルがツッ込むと、
「もちろん、男性ファンに対してもちゃんとサービスシーンは準備してあるで」
「男性ファンに対してって事は、私達のもあるんですか！？」
スバル達を安心させるようにそう言うはやてに、スバルはもう一

度ツッ込んだ。
「このサービスシーンこそが、このゲームの売りでな。ある操作をしたら、別バージョンの変身シーンがあるんねや。」
「別バージョン？」
怪しい笑みで操作を続けるはやてに、なのはが聞き返すと、
「これがその映像や」
「こ……、これはッ！！」
映し出された映像に、なのは達の表情が凍りついた。何故なら、
「なのはちゃん、なかなか際どい紐パンやったで。それにフェイトちゃんも、黒だけかと思ったら、まさか髪の毛と同じ色のモノを持っていたとは思わへんかったわ」
映像を見て硬直しているなのはとフェイトの肩をポンポンと叩いてそう言うと
「スバルとティアナも、スポーツタイプしか持ってへんかと思ったら、かなり冒険しとるやん」
次に、顔を真っ赤にしているスバルとティアナの肩を叩いて言うと、
「キャロは、よう背伸びしたモノ持ってたな。フェイトちゃんに買ってもろたんか？」
キャロに対しては頭を撫でながら聞いた。
なのは達が顔を真っ赤にし、直立不動になり、はやてに言われるがままになった理由、それは、変身シーンの時にきていた下着がみんなの勝負下着だったからである。
「まぁ、一通り見てもろたところで検証を始めよか。プレイしてくれたユーザーからの人気は間違いないんやけど、問題は店側からのクレームなんや。何でも、プレイしてくれた人達の何割かが、プレイ前に鼻血を出してゲーム機を血まみれにしたり、失神したりして、その対応に追われて大変らしいんよ。何が原因なんかな？」
デモシーンを一通り見せ終わり、問題点をあげて解決方を考えるようにはやてが切り出すと、

「どう考えても、この変身シーン以外ないでしょうが！！」
みんなが思っていた事をなのはが代表して言い、更に
「フェイトちゃん、ツッコミ！！」
「バルディッシュザンバー　一文字斬り！」
なのはに言われて、フェイトがバルディッシュをはやてにフルスイングした結果
「おうッ！」
その衝撃によりはやては窓を突き破り、
ベキッ！　グシャッ！　ベチッ！
そのまま、地上へと落ちていった。
「うわぁ……、かなり嫌な音がしましたよ」
怖くて下を見る事が出来ず、エリオ達が音だけで惨状を判断すると、
「なのはさん、はやく助けにいかないと！」
スバルが、はやての救助を切り出すと、なのはは
「何言ってるのよ。その前にこのゲームのデータを消去するさきでしょ」
「そ、そうでした。了解です」
「人命よりそっち優先！？」
それを制して、パソコンの前に向かうなのは達に、エリオがツッ込んだ。
「何言ってるのよ。八神部隊長の命よりも、私達の恥ずかしい下着付きの裸のデータを消す事のほうが優先事項でしょうが」
「そ、そうだった……、あれ、今なにか人として捨ててはいけないなにかを捨ててしまったような気が……」
ティアナに言い返されてハッとして納得しかけるも、いまいち釈然としかねない様子でエリオはなのは達の輪の中に入ったその時だった。
「た～すけんか～～い」
「ぎゃあああァァァーーー！！」

制服を血まみれにして、頭から血を吹き出しながら、這いつくばるように割れた窓から部隊長室に戻ってきたはやてに、みんなが絶叫混じりにへたり込んだ。。
「驚いたか？」
「八神部隊長、驚かさないでくださいよ！」
悲鳴を聞いて満足したのか、何事もなかったように起き上がり、ハンカチを取り出して自分についている血を拭きはじめたはやてに、ティアナがツッ込むと。
「みんな、驚き過ぎやで。キャロを見てみい」
いまだにへたり込んでいるティアナ達の視線をキャロに向けた。
「悠然と寝とるやないか」
「ビックリし過ぎて気絶してるんですよ！！」
目を回して横たわるキャロの頭を撫でながら、そう言うはやてに、エリオがツッ込んだのだった。

7（後書き）

ご無沙汰しております。
しばらく間を開けていたらＰＶ７０００超えのユニークがまもなく２０００人を超えそうなのに、感謝感激の弥本です。
これからもがんばっていきますのでよろしくお願いします。

8（前書き）

前作からお待たせしました。
驚愕の事実が発覚します！

8

「さて、サービスシーンは大幅な修正が必要なんは分かったから、次は戦闘シーンの検証を始めよか」
キャロが目を覚ましたので、はやての号令の許に、改めて検証を始めたその時だった。
「失礼します」
「失礼な事をするんやったら帰って」
「了解しました」
トランクを持って入ってきた紫の髪の女性、ギンガの入室の声にはやてがボケると、それを真に受けて帰っていった。
それを見たはやては、廊下に出て
「ツッ込まんかーい！」
「あべッ！」
自分のデバイスであるシュベルトクロイツを起動して槍投げの要領で放り投げて後頭部に直撃させた。
「ギンガ、関西人のボケを踏み倒すとはエエ度胸やないか」
「はやて、ミッドの人間によしもと新喜劇のノリを求めるのは無謀だっていつも言ってるでしょ」
「ギン姉えぇぇーーー！！」
後頭部にシュベルトクロイツが突き刺さって前のめりに倒れ込んだギンガに、スバルが駆けよって体を揺すり始めたのを見ながら、フェイトは、はやてに言った。
「で、ギンガは何の用事で来たの？」
「実は、ナカジマ三佐から『今日一日だけ預かってほしいロストロギアがある』から、ギンガに持って来させるって言われてたんよ。それで、みんなに来てもろたんよ」
「それじゃ、今までの話って前振りだったんですか！？」
驚愕の事実に、エリオが驚きの声をあげたのだった。

8（後書き）

感想、おまちしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5356o/

あの日、機動六課

2011年3月24日00時40分発行